

「霊と真理をもって・・・」

ヨハネによる福音書 4章 16～26節

かつて在籍した教会でのことです。語り種^{かたぐさ}になっていた逸話がありました。長年、教会の執事を務められた 明治生まれの方の逸話です。A さんとしておきましょう。それは、金曜から日曜にかけてのこと。すなわち、A さんは 金曜日になると銀行に出かけ、皺^{しわ}のないお札^{きっぷ}を用意します。いわゆる「ピン札」です。翌土曜日には、下着とワイシャツにアイロンをかけます。といっても、実際には御伴侶にかけてもらうのですが、糊^{のり}を利かせます。そして、日曜の朝が来ると、ピシッと糊の利いたその下着とワイシャツを着て教会に向かい、礼拝で皺のないピン札を献金する。それを文字どおり律儀にし続けた、というのです。いかにも「明治の・・・」といった風ですが、がそこには、礼拝に対する真剣勝負^{ごと}の如き姿勢が見て取れたといえます。

一方、別の教会にいたときの事です。夏の気配が感じられる頃になると 決まって、ヨレヨレのジーパンにダブダブのティーシャツといった出で立ち^{いでたち}で礼拝にみえる教会員がいました。こちらは B さんとしておきましょう。シャツはもちろん、ズボンの外に垂らしてあります。それだけではありません。首には、汗拭き用でしょうか、タオルを巻き付けています。仕事か何かで朝 よほど時間がなくて、必死に飛び出してくるのかと思いきや、そうでもないようです。毎週同じで、そのままの格好で礼拝をし、しかも礼拝後も残って、けっこうゆっくりしていきます。それが B さんのスタイルだったのです。中年の社会人男性でした。

この違いはいったい、どこから来ているのでしょうか。私は基本、姿・格好にはあまり拘^{こだわ}らないほうだと思えます。中身や内実こそが大事だと思っているからです。ネクタイをしなくたって結構、セーターでも柄シャツでもかまいません。実際、以前 特別礼拝の講師として来てくださった方で、それこそティーシャツで説教をされた先生がおられました。それなりの主張や信念を持たれてのことでしょう。そして、その説教に、私は感銘を受けたのを覚えています。地域によっては、畑仕事の合間をぬって 野良着^{のらぎ}のまま礼拝に駆けつけ、そして、説教が終わるとすぐにまた 畑に飛んで帰る。そんな 農繁期で超多忙な農家の方がおられることも知っています。要するに、問題は単なる姿・格好ではありません。そうではなくて、そこにもし 日常の惰性を引きずり、その延長の中に浸って、それでなんら気にも留^とめない、そんな慣れに緩んでしまった安易な姿が見て取れるとしたら、ということです。

キリスト教会では 周知のとおり、日曜日を「主の日^{しゅ ひ}」と呼んでいます。教会によっては「聖日^{せいじつ}」と呼んでいるところもあります。私自身はというと、次のような理由から、個人的には「主の日」と呼ぶようにしています。それは、日曜日が物理的に聖だとか聖いとかいうふうには考えないのと、できるだけ事柄の意味を読み取れるようにしたいとの配慮から、さらには「聖」という

修飾語は父・子・聖霊なる神と聖書以外には付けずにいたいという理由からです。ですが、聖書においては、「聖」という言葉はそもそも「他と分かち」ことを、すなわち「他と区別する」ことを意味しているわけです。その意味では、礼拝をまもる「主の日」がまた「聖なる日」でもあるというのは、極めて重要なことを物語っているように思われます。それは、主イエスの復活を記念し その父なる神を礼拝する主の日をウイークデーの他の日と区別し、日常の惰性や延長から切り離して、自分の生きる姿勢をいま一度、そして繰り返し新たにされる時としてまもる、ということです。つまり、こうした 聖なる緊張とでも言うべき姿勢が B さんからは感じられなかったのです。実際、B さんは礼拝の間^{あいだじゅう}中、心が気安さに砕け、落ち着きを欠いて、周囲をキョロキョロしていました。

今月の本稿タイトルは、「霊と真理をもって・・・」と付けさせていただきました。「神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない」と述べられている 24 節から取ったものです。主イエスはこうして、礼拝に向かう者の姿勢について語り、礼拝の本質について教えられます。

前回、私たちは御一緒に、「主イエスとサマリアの女」の前半部分から 聖書の語りかけを聴きました。イエス・キリストはサマリアの女性に向かって言われました。「二度と渇くことのないよう、あなたに生きた水を与えよう」(4:10、14)。ところが、彼女はその意味が分からず、「もう井戸に汲みに来なくてもいいように、その水を下さい」(4:15) と、ピントの外れた言葉を返します。そのとき、主イエスは彼女の内面を見据え、心の深みを突く問いを発せられた。「あなたの夫をここに呼んで来なさい」(16) と。サマリアの女性はすでに5人の男と結婚し、今は6人目^{どうせい}と同棲しています。当時、モーセの律法では、夫のほうからは妻を離婚できても、その逆は認められていませんでした。それからすると、彼女は5回も夫に離縁されたこととなります。もちろん、例外や抜け道はどこにもあります。女性のほうから裁判所に請願を行ない、裁判官がそれを妥当と認めた場合には、裁判所の権限で夫に離婚を命じることもあった。また、資産家の妻が夫にお金を払って、夫に離婚の申し出をさせる、というようなこともあったと言われます。とはいえ いずれにせよ、離婚の回数は多くても3回というのが当時のしきたりでした。サマリアの女性はそれを超え、しかも今や結婚すらせずに、男と一緒にいる。心が底冷えするほど荒^{すさ}んでいたことでしょう。本当の愛に飢え、真実の関係に渇いていた。そこに、イエス・キリストの熱い思いが迫りました。そして、自分の最も求めていたその急所を突かれ、しかも すべての隔てや差別を乗り越えてひたすら熱く迫る主イエスの真実に触れ、彼女はそこに 神的なものを感じ取ったのではないのでしょうか。ですから、サマリアの女性はここに至って、次のように言います。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています」(19～20)。それは今や、「神を真実 礼拝し、神に本当に^{まみ}見えることのできるのはいったい、どこでなのですか」という、彼女の必死な求道の姿に感じられてなりません。

人種と信仰の純潔性をめぐって ユダヤとサマリアの間に歴史的な反目があったことは、前回 触れたとおりです。そして それは、自然の成り行きとして、礼拝の場所をめぐる対立ともなりました。前回 申し上げたとおり、深刻な反目の結果、サマリア人はサマリア地方の中心にあるゲリジム山に自分たちの神殿を建設します。サマリアの女性が「この山」と言ったのは、このゲリジム山のことです。それは、聖書をかなり強引に読み込み、時に意図的に読み替えることすらして、「我々のゲリジム山こそ、最も聖なる、最も祝福された場所だ」としたことから来ていました。こんな逸話も伝えられています。あるとき、神殿で礼拝をするためにエルサレムに向かうユダヤ人がいました。その道すがら、ユダヤ人は一人のサマリア人に出会います。サマリア人が尋ねます。「どちらへ行かれるのですか」。ユダヤ人は答えました。「祈りを献げるため、エルサレムに行く途中です」。すると、サマリア人はこれに答えて曰く、「あんな糞っ垂れた所よりも、私たちの祝福された山で祈ったほうがいいとお思いになられませんか」。サマリアの女性も、そのような思いで、ゲリジム山にある自分たちの神殿を仰ぎ見ていたものと思われまゝ。実際、ゲリジム山は、彼女が水を汲みに来ていた「ヤコブの井戸」の近く、見上げると目に入るそのところに立っています。当時、ゲリジム山の神殿はユダヤによってすでに破壊されていましたが、礼拝は続けられていました。サマリアの女性は水を汲みに来るたびに独り この神殿を仰ぎ見て、自分の人生を思い、そこからの救いを祈り求めていたのではないか。何人もの男に求めても得られなかった自らの深い渇きを満たすものを祈り求めていたのではないか。そう思われます。そして、それは結局、真実の神に出会う以外には見出せないものだったのでしょう。

そんなサマリアの女性に、イエス・キリストは言われました。22 節、「あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ」。人種的・民族的な優越性を言われたものではありません。正しい知識に基づく信仰を言われたものです。実のところ、サマリア人は旧約聖書の最初の 5 書、すなわち「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」だけを自分たちの聖書とし、それ以外は聖書から除いてしまっていました。簡単に言えば、自分たちの主張に差し障りのない辻褃の合うところだけを残した、ということです。箇所によっては、言葉を書き換えているところもありました。聖書を読むとはそもそも、歴史の中で、また歴史に照らして、神の出来事とその語りかけを読み取ることと言えるでしょう。サマリア人は、聖書の信仰にとって大切な その「歴史の書」を大部分、除いてしまっていました。さらには、魂の賛美であり祈りでもある信仰の歌、「詩編」もありませんでした。信仰生活の具体的な知恵を説く「箴言」もありません。そして、移り行く歴史のなか、神の義と愛とを説き、救い主キリストの到来を予告し続けた「預言の書」も外されていました。

主イエスが「あなたがたは知らないものを礼拝している」と言われたのは、こうした背景から来ていました。サマリア人の信仰は このように、その出発点からして、よく知ってもいない、正しい理解を持っていない 偏った歪んだものだったからです。しかも、サマリア人の信仰は その根っこにおいて、神に対する愛と理解にではなく 恐れと無知とに基づいていた、とも言われます。つまり、サマリア地方がアッシリア帝国に征服され、異国の民が侵入してきたとき、彼らは自分たち

の神々を携えてきた。その彼らとサマリアの人々との雑婚が始まり、そのなかで サマリア独特の宗教が形成されていきます。しかし それは、「現地たたの神を取り除いたら、どんな祟りがあるか分からない」という、侵入してきた異国の人々の恐怖心から維持されたものでもありました。そうした土壌から、サマリアの信仰には 神に対する恐れと無知とが見て取れた、というのです。

こうした歴史の事実から 私たちには学ばねばならないことがあるように思われるのですが、いかがでしょうか。それは、知らないものを礼拝しない、よく理解もしないままに 誤った信仰いで好い加減かげんな礼拝をしない、ということです。言い換えれば すなわち、自分が何を礼拝しているのか、礼拝しているその神がどんなお方なのか、それを知って礼拝する、ということです。信仰とは霊的な事柄であり、魂の息づかいであると言われます。しかしまた それは、私たちの全体で関わるものとも言えるのではないのでしょうか。信仰は、しばしば見られるように、感覚的・感情的な応答から始まるかもしれません。けれども、それは同時に、知的な理解を排除するものでもないと思います。無知・無理解の信仰は むしろ、誤りのある信仰ともなります。実際、「信仰は単に知性を働かせるようなものではないが、しかし、信仰上の誤りの極めて多くがまさに知的な怠惰に起因している」と語る人もいます。

したがって、それは一つには、迷信的な信仰や礼拝を良しとはしないように思われます。あるべき生き方を求めてそうするのではなく、罰ばちや祟りたたりといった ある種の裁きこわを恐がつてまもる信仰はやはり、本来の信仰とは違っているのではないのでしょうか。他の折にすでに御紹介した 今は亡き清水しみず恵三けいぞう牧師の一文ですが、息子むすこさんを亡くされた親御おやごさんに宛てて、こんな手紙を書いておられます。

お手紙を頂いて以来、あまりにも悲痛な内容に考え続けています。・・・それにしても何ということでしょう。お子さんが十四歳で列車に飛び込んで即死されたとは。いつも通りに学校で過ごし、友人たちと楽しく話し合いながら帰宅し、夕食後に学校の話をしてながら ご家族でみかんを食べての一時後のことだったのですね。そんなことがあってよいのでしょうか。それからの四ヵ月、どんなにつらい毎日を過ごされたことでしょうか。「この悲しさの中で、何日、自分が辛抱できるかと思えます。明日が来るのがこわいのです」と書かれたお気持ちは、私の理解することもできない世界です。

しばらく出すようにして、今、私の思いつくことを書きます。底の浅いものですが、何とかお役に立てればと願うのみです。何よりも先まず、お子さんが亡くなった原因も理由も、最終的には分からないのではないのでしょうか。・・・むりやりに早く結論を出そうとして、神さまのせいや親のせいにしてしまっってははいけません。

こうした いわゆる事故や災難や不幸や失敗に対して必ずでてくる答えの一つに、宗教的な面からの意見が出てきます。中には驚くほど突拍とつぱようし子もない意見もあります。例えば、何代か前の先祖のお祭りをしていなかったからとか、便所の方角が悪かったとか、何かのバチが当たったとかいうたぐいへいぜいです。平生なら気にもしないことであっても、追いつめられた時には、ひょっとしたらそんなこともあるかと、動揺してしまうことがあ

ります。占いのたぐいもあります。・・・それに、それだけが原因だと、確信に満ちて言いすぎる宗教的表現は危険信号と思ったらよいでしょう。人間が神さまになりかわったような態度や言葉を示す時は、頼もしいようにみえて、まやかしが多いのです。

こうして、手紙は^{しんし}真摯な思いをもって続けられますが、清水先生も言われるように、信仰はしばしば、信仰心を持たないと良からぬことが起こるかもしれないという、ある種の漠然とした恐れや不安に基づいていることも少なくありません。しかしながら、本来の信仰とは、恐怖心からではなく、自分自身の内なる闇の現実とそれに対する神の顧みの事実に感謝するところから生まれるものなのではないでしょうか。気分屋の神様を^{おこ}怒らせないよう、^{なだ}宥めたり^{すか}賺したりするようなものではないと思います。

そして、もう一つ。私たちは自分好みの一面的な信仰に陥らないよう注意せねばならない、ということ。そのことを、サマリアの歴史の事実から教えられるように思うのです。聖書を好きのところだけ、好きなように読む。そして、好みに合うことだけを信じ、好みに合う神だけを礼拝する。そんな神本位でない自分本位の信仰や礼拝です。アメリカにいたとき、ショックを受けたことがありました。出席していた教会が新しい牧師を招こうと^{しょうへい}招聘委員会を組織し、招聘の基準について教会員にアンケートを取ったときです。その中に一人ならず、「候補は黒人を除外し、白人に限定する」と記した人たちがいたのです。有色人種であった私もまた、そういう目で見られていたのか、と改めて知らされました。聖書の中にもたしかに、例えば奴隷制など、差別的な事象が記されているのは事実です。とはいえ、それは歴史展開の一断面としての事象であり、「人を差別しろ」などと、聖書のどこでイエス・キリストがおっしゃっているのでしょうか。自分の考えに合わないところには蓋をする。そして、都合のいいところだけを声高に唱える。サマリア的な そんな信仰に陥らないよう、私たちは心して、^{みことば}御言葉を丁寧に、そして謙虚に読まねばならないと教えられます。

主イエスは言われました。「わたしたちは知っているものを礼拝している」。問題は多々あったものの、ユダヤの人々は少なくとも、聖書の全体に目を向け、割り引きなしにこれに聴こうとしていました。そして、そこに預言されている救い主キリストの到来を心待ちにしていました。思い込みや思わくによる礼拝ではなく、真つ当な知識に基づいた礼拝。イエス・キリストが言わんとされたのは、まさにここにポイントがあったのではないのでしょうか。使徒パウロもまた、「テモテへの手紙 二」でこう語っています。「わたしは自分が信頼している方を知っている」(二テモテ 1:12)。適切な理解は礼拝に不可欠なものであり、それは好みや先入観を脇にやった、^{みことば}御言葉の誠実な理解から来るように思われています。

今月のタイトルとして採らせていただいた聖書の一節、「霊と真理をもって」ということも、こうした一連の事柄に関係しています。サマリアの女性との対話がクライマックスを迎えた そのとき、主イエスは言われました。23 節、24 節、「しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって 父を礼拝する時が来る。・・・神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない」。礼拝の本質とそれをまもる者の姿勢とを説かれた

ものです。ちなみに この箇所は、一つ前の口語訳聖書では「霊とまこととをもって」と訳されていました。すでにお気づきのことと思いますが、「まこと」と「真理」とではやはり、ニュアンスが少しばかり違っています。多少なりとも、その意味合いが違ってきます。特に日本人である私たちにとって「まこと」という言葉には独特なニュアンスが伴いますので、その違いは時に無視しえないものとなるように思われます。例えば、「・・・に謹んで哀悼のまことを捧げる」といった表現があります。これは御存じのとおり、為政者が戦争犠牲者の追悼などに好んで用いる言い回しで、一見 特殊なものと思われるかもしれませんが、しかし、私たちが使う普段使いの「まこと」にもこれと相通じるニュアンスがあり、私たちは例えば そうした意味合いをも携えながら、この言葉を使っているわけです。こうしたことを考えるにつけても、「まこと」か「真理」かという訳語の選択には慎重にならざるをえません。実際、この点については今なお 議論が続いているわけで、皆さんははたして、どちらを選ばれるのでしょうか。いずれにせよ、事はそもそも、元々のギリシア語 ($\acute{\alpha}\lambda\eta\theta\epsilon\acute{\iota}\alpha$ アレーセイア (イ) $<\acute{\alpha}\lambda\eta\theta\epsilon\acute{\iota}\alpha$ アレーセイア) に両方の意味があるためです。ですが、ここまでイエス・キリストが問題にされてきたのは、一連の文脈からすると、いったい何にその焦点があると見るべきか。それは これまで見てきたように、サマリア人たちの不適切な聖書知識であり、それに基づく歪んだ信仰理解、礼拝理解でした。「あなたがたは知らないものを礼拝している」と、22 節で言われているとおりです。つまりは、サマリア人の知識、理解の不十分さを、主イエスは言われた。「真理」の理解の不適切さを言われたのではないのでしょうか。そうした意味で、この箇所については、現在の新共同訳聖書のように「真理」と訳すほうがより妥当かと思われます。実際、訳文の厳密さで知られる、いわゆる『岩波訳聖書』と呼ばれる翻訳でも、ここは同じように「真理」と訳出されています。そもそも、「霊」と「まこと」という、意味がある種 近くて似ている言葉を二重に繰り返すというのは、ここでの文脈には不釣り合いでしっくりこないように思われます。ということで、ここでは現行の新共同訳の訳語に基づいて本稿を展開していますが、皆さんはどうお考えになられるのでしょうか。御参考までに付け加えると、一昨年 (2019 年) 新たな改訳版として刊行された『聖書 聖書協会共同訳』では、「神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真実をもって礼拝しなければならない」と訳出されています。二つの意味をあわせ持たせようとする趣旨でしょうか。

兎にも角にも、礼拝は単なる外面的・形式的儀式でないのは言うまでもないでしょう。また、出席すれば、それでなにか 功德や御利益があつて、聖くされるというものでもありません。礼拝に向かう姿勢が態度となって、外に出ることはある。冒頭の B さんの例にあるとおりです。けれども同時に、敬虔な物腰で声清らかに讃美歌を歌うことがそのまま 真の礼拝を意味するかというと、そうともかぎりません。礼拝のプログラムを教会らしい整った仕草でつつがなくこなすことが そのまま、あるべき礼拝を意味するわけでもないからです。本来の礼拝とは、「霊」なる神に「霊」で応えること。魂の深みから私たちの声を絞り出し、内なる心を注ぎ出して、そして裸で神の御前に立ち、祈りをもって その語りかけに真つすぐ聴き入ることではないのでしょうか。礼拝とは何よりもまず、私たちの内なる真実を差し出して、祈りつつ 神様と誠実に向き合うことだと思ふからです。そして、そのところにおいて同時に、「真理」がまた 求められもするというのではないかと。礼拝する神様に

ついで適切なしかるべき理解です。実際、ここで注意しなければならないのは、「霊と真理をもって」と記されているその部分が元々のギリシア語ではただ一つの前置詞（ἐν）で一つに括られていることです（ἐν πνεύματι καὶ ἀληθείᾳ）。つまり、「霊をもって、また真理ももつて」と霊と真理が別個の二つのこととしてではなく、一括りのこととして（ἐν ... καὶ ...）述べられているということです。要するに、「礼拝は、霊をもって行なわなければならない。しかし、それは真理と切り離すことのできないものであって、神についてのしかるべき理解があつてのことなのだ」と、主イエスはそう言われているように思います。

イエス・キリストが「救いはユダヤ人から来る」と言われたのももちろん、サマリア人に対する差別意識から出たものではありません。そうではなく、「救いはユダヤ人の中から出るメシアから、すなわち 救い主キリストから来る」と、(旧約) 聖書の預言の事実を正しく認識するように、と言われたのでした。私たちは常に、そして繰り返し問いかけられているのではないのでしょうか。どこに真理を見るか、そして どこに救いを見、どこに救い主を見るか、と。サマリア人は都合の良い言葉だけに目をやり、好きな言葉だけに耳を傾けることで、その目を塞ぎ、耳を塞いでいました。そのようにして、真理を見過ごし、救い主を見失っていました。これを見るにつけ、私たちは開かれた目でいたい、開かれた耳でいたい、そして 開かれた心で知るべき事柄をきちんと理解したいと思わされています。

蛇足ながら、礼拝をめぐる「場所」の問題について、イエス・キリストとサマリアの女性のこの対話から、あと一つ学ぶことができるように思います。21 節で、主イエスは言われます。「この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る」。それは、礼拝というのはそもそも本質的には場所に囚われない、ということではないのでしょうか。エルサレムにあるシオンの丘の神殿であろうと、サマリアにあるゲリジム山の神殿であろうと、そうしたことは問題ではない。つまり、それ自体として物理的に聖なる礼拝の場所があるわけではない、ということです。私たちは言うまでもなく、礼拝堂という空間を信じているわけではありません。神は、場所や物に縛られて、そこに閉じ込められてしまうようなお方ではありません。ここでもまた、私たちは事の本質に目を向けるように、と促されているのでしょう。真の礼拝に必要なのは 霊と真理をもってその場に臨むこと、そしてその中心にはほかでもない キリストがおられる、ということです。

今月の箇所は、イエス・キリストの驚くべき言葉で終わっています。26 節で、「それ〔すなわち、キリストと呼ばれるメシア〕は、あなたと話をしているこのわたしである」と、主イエスはそう言われます。これは、「宣言」とも呼ぶべき、強く明確な表明に響きます。「メシア」とは、旧約聖書が書かれたヘブライ語で「救い主」を意味する呼び名です。「キリスト」は、そのメシアが意味する救い主のギリシア語表現です。私利私欲と無縁のところ ひたすらいのちの回復を願って迫り続け、手を差し伸べ続けてくださるイエス・キリスト。そのお方を、サマリアの女性は目の当たりにしました。そして、その内に、それまで経験したことのない愛と真実を見た。出会った

ことのないそれらに触れた。そのようにして ついには、尋常の人の内には見ることのできない、それを超えたものを感じ取ったのでした。そんな彼女は、ですから、ただこう言うしかできなかったのでしょうか。25 節、「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます」。これに対して、「わたしがそれである」と、主イエスはそう告げられたのでした。

それにつけても、このやり取りの中にサマリアの女性の素直さと正直さを見る思いがして 多くを教えられるのは、はたして この私だけでしょうか。実際、彼女の中には、主イエスの真実に触れ、心を動かされて、それをそのままに躊躇うことなく感動する心が残っていたのだらうと思います。いやむしろ、前回も申し上げたように、このサマリアの女性は、真実なものに飢え渴き、その在り処を求める必死さが人並み以上に純粹で強かった。だからこそ、その期待が裏切られたとき、心の揺れも人並み以上に大きく、自暴自棄に陥ったのではないか。その意味では、私たちがどこかに置き忘れてしまった純粹さと必死さに、このサマリアの女性は気づかせてくれるのではないか。そう思わされてなりません。

事実、サマリアの女性の純粹さは、直後のその様子に如実に見て取れます。今月の箇所直後の 28 節、29 節で、聖書はこう語ります。「女は、水がめをそこに置いたまま町に行き、人々に言った。『さあ、見に来てください。わたしが行ったことをすべて、言い当てた人がいます。もしかしたら、この方がメシアかもしれません』」。心の内深くに押し込めていた渴きが今、その答えを与えられ、喜びとなってほとぼしり出ました。激しいほどの、魂のほとぼしりです。イエス・キリストが約束されたとおりに、今、生きた水がサマリアの女性の内で泉となって湧き上がり始めたからです。

本来の礼拝とは、どんな礼拝でしょうか。私は、サマリアの女性の感動にこそ、その原点を見る思いにさせられています。探し求めていた救い主キリストに出会い、それがどのようなお方なのか、それをそれなりに理解したうえで、湧き上がる喜びに身を躍らせる。そこには、正直な自分がいます。真実な渴きがあります。本物を求めてやまない純粹さがあり、呼びかけに自分を開く謙虚さがあります。そして、求めるものを見出したとき、人目を憚ることなく そのうれしさを溢れさせる素直さがあります。これ以外のどこに、霊と真理があるのでしょうか。主イエスはサマリアの女性をそのところに招かれ、そのところに導かれて、そして そこに一緒に立ってくださったのでした。神が求められる「まことの礼拝」(23) とは このように、イエス・キリストの霊と真理に包まれつつ、自身もまた、自らの霊と真理をもって 主イエスの父なる神を拝することではないでしょうか。

真の礼拝はその本質において、場所や形に縛られません。その意味では、どこでも、どんな仕方でも、礼拝はできるのでしょうか。がしかし 同時に、それとは逆に、私たちが霊と真理に欠け、また イエス・キリストの霊と真理が蔑ろにされるとしたなら、どこで・どんな仕方になされようとも、それはあるべき礼拝にはなりえない。そうも言えるのではないのでしょうか。そのことを心に刻み、魂を注ぎ出して、礼拝の場で神の御前に出たい。神様の顧みと主イエスの伴いとを祈り求めつつ、礼

拝の場に臨みたい。私はそう祈り願っています。

イエス・キリストは 23 節で、「まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である」と言われました。こうして、主イエスの来られたそのとき、^{まこと}真の礼拝が始まりました。今また、主イエスの来られるそのとき、^{まこと}真の礼拝が始まります。イエス・キリストを私たちの内に迎え入れる。魂の奥深くにお迎えする。そのようにして、私たちの礼拝の場に 主イエスに来ていただく。繰り返し心を開き、もう一つ大きく開いて、イエス・キリストに内なる扉を開き続ける。そのことを祈り求める者とされていきたいと願います。サマリアの女性に与えられた、尽きざるいのち。そのいのちの神を礼拝する恵みはそこから始まるのではないのでしょうか。

〔祈り〕

愛する神様。

あなたを礼拝する私たちを顧みてください。それがどこであろうと、どのような形であろうと、心を注ぎ出してあなたに向かう ただその真剣さのゆえに、礼拝に臨むすべての者たちを受け入れ、あなたのいのちに導き入れてくださいますように。

私たちが携える心は全き心ではありません。祈りも讃美も、語る口も聴く耳も、^{しみ}染みと^{よご}汚れの付いたものばかりです。慈しみの神様、私たちのすべてをあなたの恵みの中に置いてください。礼拝の時もまた、その場を^{ゆる}赦しの^{みて}御手で包み、私たちの貧しい心をも受け入れてくださいますように。御子イエス・キリストにあつて あなたが私たちの内に臨み、私たちがあなたの内に^{とど}留まれるよう教え導いてください。

週ごとに備えられる礼拝の恵みを感謝いたします。私たちの霊と真理を^{みこころ}御心に^{かな}適うものとし、御子の^{みこ}霊と真理の内に新たないのちを^{みいだ}見出せる者としてください。

主の御名によって願い、お祈りいたします。

アーメン